

無助詞格のタイプについて*

杉 本 武

1. はじめに

日本語の話しことばにおいては、しばしば助詞なしで名詞句が出現することがあり、「助詞の脱落」あるいは「無助詞格」などと呼ばれてきた（以下の例では、 ϕ でもって助詞が脱落していることを示す。また、必要に応じて、脱落したと考えられる助詞を括弧内に示す）。

- (1) さっき太郎 ϕ (が)来たよ。
- (2) その本 ϕ (を)貸してくれる？
- (3) 駅 ϕ (に)着いたら、電話して。
- (4) 僕 ϕ (は)知らないよ。

これらの例では、見かけ上、それぞれ「が」「を」「に」「は」が脱落しているように見える。

このような現象については、従来、一つには、どのような格助詞が、どのような場合に脱落するのかが研究されてきた。また、次のような、助詞を補うとニュアンスが変わってしまうような例があり、 ϕ 形式が特有の機能を持つ場合があることも指摘されてきた。

- (5) はさみ ϕ ある？

この場合、「はさみがある？」とも「はさみはある？」とも異なったニュアンスを持つ。

本稿では、前者の問題に焦点を当て、無助詞格の現象は、一様なものではなく、三つのタイプに分けられるものであり、それぞれ異なった言語レベルの条件が働いていることを論じる。なお、以下では、格助詞Xが脱落しているように見える場合、「X格相当の無助詞格」と言うことにする。

2. 問題のありか

本節では、従来の無助詞格の取り扱いを概観しながら、その問題点を示していきたい。

まず、ガ格、ヲ格相当の無助詞格については、従来、その結合価や文法格ないしは構造格としての性格から述べられることが多かった。まず、村木(1991)は、文法格とその他の格を区別する根拠の一つとして、「話しことばで、格形式がゆになるのは、書きことばでガ、ヲがあらわれる名詞句が多く、まれに二の場合もある (p.146)」と述べているが、これは、逆に言えば、無助詞格の成立に「が」「を」「に」の文法格としての性質が関わっていると解することができる。

また、丸山(1995)は、「が」「を」に関して次のように述べている。

- ・中核的な格ガ・ヲ・ニのうち、ヲが最も動詞からの要求度が高いと考えられ、無助詞格成分の格もヲ格であることが多い。
- ・ヲ以外については、ガ・ニのうち、結合価パターンの後ろの方に記述されている格成分(動詞に一番近いもの)である確率が高い。動詞に近いものは、動詞との結合価が強く、動詞に、より強く要求されている成分であると考えられる。(項構造を内項・外項に分ける立場に立てば、無形格成分の格は、内項であることが多いということになる。)

丸山(1995: 375f.)

このように、結合価において、動詞からの要求度が高い場合に、無助詞格になりやすいと考えられている。

また、三原(1994: 112ff.)などのように、構造格である「が」(総記の「が」を除く)「を」の場合、INFL ないしは他動詞から抽象格が与えられるため、形態格である格助詞がなくとも、格フィルターに違反しないとする見方もある(Saito (1985), 西垣内(1992)も参照されたい)。

これらは、いずれも、ガ格、ヲ格相当の無助詞格を文法的条件から記述しようとするものである。一方、Tsutsui(1983)においては、ガ格相当の無助詞格の条件として、次のようなものが挙げられている。

Emphatic Element Condition :

The ellipsis of *ga* of an NP-*ga* is highly unnatural if the NP-*ga* is the most emphatic element in the clause.

Last NP Condition :

The ellipsis of *ga* of an NP-*ga* is the least unnatural in term of the position of the NP-*ga* if the NP-*ga* in a clause is overtly or covertly preceded by another NP and immediately followed by its predicate.

Related Utterance Condition :

The more closely an utterance is related to the hearer, the more natural the ellipsis of *ga* in the utterance is.

Tsutsui (1983 : 199)

これらの条件のうち、“Last NP Condition”は、文法的条件であるが、“Emphatic Element Condition”、“Related Utterance Condition”は、談話上の条件と考えられる。Tsutsui (1983)では、これらの条件の相互関係についても論じられているが、無助詞格の条件をどの言語レベルに位置づけるかという点で問題を含むであろう。また、“Last NP Condition”に関しても、なぜ、顕在的、潜在的を問わず、先行する名詞句が存在しなければならないのか、奇妙なところである。

次に、二格相当の無助詞格については、従来から問題になるところであった。一つには、沼田（近刊）に指摘があるように、研究者により観察にずれが生じるという問題がある（沼田（近刊）は、これを歴史的変遷、方言の観点から解明しようとしたものである）。もう一つは、丹羽（1989）、丸山（1995）、石田（1997）などで指摘されているように、二格相当の無助詞格が、「に」の中でも方向、着点を示す場合におおむね限られるという点に関わる問題である。

(6) 太郎なら、あっち ϕ (に)行ったよ。

(7) その本、カバン ϕ (に)入れといて。

ところが、相手を示す「に」の場合、無助詞格にならない。

(8) *太郎なら、花子 ϕ (に)会いに行ったよ。

(9) *英語をうちの息子 ϕ (に)教えてくれる？

また、使役文の被使役主、受動文の動作主を示す「に」も無助詞格にならない。

(10) *その仕事、太郎 ϕ (に)やらせたんだって？

(11) *君、太郎 ϕ (に)騙されたんだよ。

ここで疑問が生じるのは、二格相当の無助詞格が方向、着点を示す場合に限られるのはなぜかということである。例えば、広い意味での「に」の脱落の例として、「は」の前での脱落があるが、この場合、「に」一般に成立する。

- (12) a. 東京(に)は太郎に行ってもらおう。(着点)
 b. 太郎(に)は次郎が連絡しているはずだ。(相手)
 c. 太郎(に)はその仕事をやらせよう。(使役文の被使役主)

また、連体格助詞「の」の前には、「に」が現れず、脱落するか、「へ」に交替するが、この場合も、(副詞語尾の「に」も含め)「に」に均しく生じる。

- (13) a. 東京駅に到着する。(着点)
 b. *東京駅にの到着
 c. 東京駅への到着
 (14) a. 太郎に連絡する。(相手)
 b. *太郎にの連絡
 c. 太郎への連絡
 (15) a. 8時に開始する。(時格)
 b. *8時にの開始
 c. 8時の開始
 (16) a. 必死に努力する。(副詞語尾)
 b. *必死にの努力
 c. 必死の努力

また、ガ格、ヲ格相当の無助詞格とのからみで言えば、「に」の中でも、「教える」のような複他動詞文の間接目的語、使役文の被使役主、受動文の動作主の場合のような文法格と考えられるような場合に、むしろ無助詞格が成立しないという点は、奇妙に見える。むしろ、何らかの意味的な条件が関わっているのではないかと予測される。

このように、無助詞格全体を見ると、その条件には、様々な言語レベルのものが関わってくるように見え、無助詞格の現象全体を単一の原理によって、均一に扱うことには問題があるのではないかと考えられる。以下では、無助詞格をタイプ分けし、それぞれに異なった言語レベルの条件が働いていることを示していきたい。

3. 主題としての無助詞格とガ格、ヲ格相当の無助詞格

従来から指摘されているように、最も無助詞格が成立しやすいのは、ヲ格相当のものである。次にヲ格相当の無助詞格の例を挙げる。

- (17) a. 太郎は次郎にこの本を薦めたの？

b. 太郎は次郎にこの本を薦めたの？

ここで、a.とb.は、同義と言ってよく、a.の無助詞格をb.のように「を」で置き換えることが可能である。一方、この語順を変えると、そうは言えなくなる。

(18) a. この本 ϕ 、太郎は次郎に薦めたの？

b. この本を太郎は次郎に薦めたの？

c. この本は太郎は次郎に薦めたの？

この場合、無助詞格を「を」で置き換えても、「は」で置き換えてもニュアンスが変わってしまう。「を」を用いた場合、強調のニュアンスが生じ、「は」を用いた場合、対比のニュアンスが生じるが、a.には、そのようなニュアンスはない。また、通常、無助詞格成分の後ろにポーズが置かれるという特徴もある。

これは、従来言われている、無助詞格成分が文頭にあればあるほど、主題としての性格が強くなるという現象である (cf. 丹羽(1989), 丸山(1995)など)。それでは、(17a)と(18a)は、現象として異なったものとみなした方がいいのであろうか。これに関して、加藤(1997)は、「しかし、助詞がないという文構造の形態的特質にのみ着目すれば、つまり見かけの上では〈助詞の省略〉も〈ゼロ助詞〉も変わりがない (p.23)」と述べている。ここで、「助詞の省略」とは、「助詞を補っても、意味上有意の差を生じない」もの、「ゼロ助詞」とは、「助詞を補うと意味上有意の差を生じる」ものである (加藤(1997:35))。この理由として、意味上有意の差を生じるかどうかを「判断するのは論者の言語直感のみであ (加藤(1997:35))」り、「両者の間に峻然と線を引けるという保証はない (加藤(1997:36))」ということを挙げている。

確かに、このような意味上の違いは、明確ではなく、明確に二分することは難しい。しかしながら、これは問題設定を誤っているように思われる。「助詞の省略」とするか「ゼロ助詞」とするかは、あくまでも理論的枠組によるものであり、ここで言う「意味上有意の差を生じる」かどうかは、現象上の問題である。意味上の差を認めた場合、理論的枠組によって、「意味上有意の差」を生じるものと生じないものとで、前者をゼロ助詞、後者を助詞の脱落とすることも可能であるし、両者をともにゼロ助詞とすることも可能であろう。事実、抽象格付与と格フィルターという道具立てに基づく記述であれば、「意味上有意の差を生じない」もの、つまり、「助詞の省略」とされるものも、元から助詞がないものとして扱われることになる。

ここで「意味上有意の差を生じる」かどうかは、文中における位置の違いと関連しているように見える。むしろ、正しい問題設定は、無助詞格成分が文頭近くに現れた場合と述語近くに現れた場合とで、同一の現象とみなしてもよいのかどうかということであろう。意味上の差に関わる観察は、両者を同一の現象とみなすかどうかに関わる根拠の一つに過ぎない。それでは、両者を同一の現象とみなすかどうかに関わる、その他の根拠はあるのであろうか。

一つは、従来から指摘されている、本来従属節中の成分が無助詞格となり、文頭に現れた場合、従属節のみならず、文全体に大きく係っていくという現象がある。

(19) a. 参考書を太郎に貸したんだけど、返してくれないんだ。

b. 参考書 ϕ 、太郎に貸したんだけど、返してくれないんだ。

これは、このような無助詞格成分の後ろにポーズが置かれるという現象とともに、両者の構造上の位置の違いを示唆する。つまり、a.においては、文頭にあって、「参考書を」は従属節中に納まっているが、b.においては、「参考書 ϕ 」は、主節より高い位置にあるということになる。これは、このような無助詞格成分が、構造上、主題と同じような位置を占めるということ意味する。このことは、次のような文によって示すことができる。

(20) 僕の持ってる参考書 ϕ (を)、太郎に2冊を、残りを次郎に貸したんだけど、二人とも返してくれないんだ。

ここで、従属節中のヲ格の位置は「2冊を」「残りを」が占めているため、「僕の持ってる参考書 ϕ 」は、従属節中にあるとは考えられない。

また、次の文を見てみたい。

(21) a. 山田さんが息子さんの家庭教師を探してるよ。

b. 山田さんが息子さんの家庭教師 ϕ 探してるよ。

この場合、a. と無助詞格になったb. とは同義と考えられる。ところが、問題の無助詞格成分を前置した場合、明らかな意味の違いが生じてくる。

(22) a. 息子さんの家庭教師を山田さんが探してるよ。

b. ?息子さんの家庭教師 ϕ 、山田さんが探してるよ。

b. は、完全に自然とは言えないが、a. とは意味が変わってしまう。a. の場合、「息子さんの家庭教師」に、特定の人物の読みと不特定の人物の読み（つまり、「家庭教師になってくれる人を探している」の意の読み）の両方が可能であるが、b. の場合、特定の人物の読みしかできないであろう。

丹羽（1989：41）は、「名詞の既知性が低いほど主題性が低い」と述べてい

るが¹¹⁾、上の例で不特定の読みの場合、名詞の既知性は低いと考えられ、主題性は低くなるが、語順の上では文頭にあるため、主題性が高くなり、矛盾をきたし、そのような読みがしにくくなると考えられる。

なお、丹羽(1989)などで指摘されているように、デ格、ト格、カラ格相当の無助詞格は、次のように、文頭にある場合には適格になる(例文は丹羽(1989: 42)による¹²⁾)。

- (23) a. *太郎がよくこのコート ϕ (で)練習してたよ。
 b. このコート ϕ (で)太郎がよく練習してたよ。
 (24) a. *太郎があの子 ϕ (と)昔つきあってたんだって。
 b. あの子 ϕ (と)太郎が昔つきあってたんだって。
 (25) a. *桃太郎がこの桃 ϕ (から)生まれたんだよ。
 b. この桃 ϕ (から)桃太郎が生まれたんだよ。

これらの場合、文法格ではないため、述語の直前においては無助詞格が許されないが、主題位置には現れることができると考える。

以上の点から、ヲ格相当の無助詞格成分が、文頭に現れた場合と述語の直前に現れた場合とでは、現象として異なったものである可能性がある。それでは、次のように、文頭でも述語の直前でもない場合、つまり文中にある場合はどのようなのであろうか。

- (26) a. ?太郎がこの本 ϕ (を)次郎に薦めたの?
 b. 太郎はこの本 ϕ (を)次郎に薦めたの?

この二つを比べてみると、無助詞格成分に「太郎が」が先行している a. よりも「太郎は」が先行している b. の方が、より自然に感じられる。これは、どのように説明されるのであろうか。a. では、非主題である「太郎が」が先行しているため、構造上、無助詞格成分は主題位置には現れ得ない。一方、b. では、先行しているのは、主題である「太郎は」であるので、無助詞格成分は主題位置に現れ得る¹³⁾。丹羽(1989)でも、名詞の既知性が低い場合、語順による適格性の差が生じることが指摘されている。次は、丹羽(1989: 44)の例である(例文の判定は丹羽(1989)による)。

- (27) a. 山田さんがきのうわざわざ花 ϕ (を)届けてくれたよ。
 b. ?山田さんがきのう花 ϕ (を)わざわざ届けてくれたよ。
 c. ?山田さんが花 ϕ (を)きのうわざわざ届けてくれたよ。
 (28) a. 大変だ。過激派が香港で日航機 ϕ (を)乗っ取ったんだって。
 b. ?大変だ。過激派が日航機 ϕ (を)香港で乗っ取ったんだって。

c. ?大変だ。日航機φ(を)過激派が香港で乗っ取ったんだって。
 丹羽 (1989) によると、既知性の低い名詞は主題性が低いため、本稿で言う、主題位置には現れにくい。b. c. が不自然になるのは、非主題の無助詞格成分は、述語の直前になければならないということを示していると考えられる⁽⁴⁾。次も、同様の例である。

(29) a. ?誰か、水φ(を)ポットに入れといて。

b. 誰か、ポットに水φ(を)入れといて。

これは、ヲ格名詞句の既知性が高い、次の例と対照的である。

(30) a. 誰か、その本φ(を)カバンに入れといて。

b. 誰か、カバンにその本φ(を)入れといて。

以上の点から、ヲ格相当の無助詞格成分は、述語の直前に現れ、それ以外のものは、主題位置に現れると考えられる。

次に、ガ格相当の無助詞格であるが、これについても、ヲ格相当の無助詞格と同様のことが言えるが、ここで問題になるのは、2. でふれた、Tsutsui (1983) で提案されている“Last NP Condition”である。次に再掲する。

Last NP Condition :

The ellipsis of *ga* of an NP-*ga* is the least unnatural in term of the position of the NP-*ga* if the NP-*ga* in a clause is overtly or covertly preceded by another NP and immediately followed by its predicate.

Tsutsui (1983 : 199)

これは、次のような例によって根拠づけられている⁽⁵⁾。

(31) a. 君宛に学校へ手紙φ(が)届いていたよ。

b. 君宛に手紙φ(が)学校へ届いていたよ。

c. 手紙φ(が)君宛に学校へ届いていたよ。

このうち、最も自然なのはa. であり、これはLast NP Condition から予測される。Tsutsui (1983) の調査では、c. はa. よりも自然でないとされるが、これも次のように無助詞格成分に指示詞を付加すると、より自然になるであろう。

(32) その手紙φ君宛に学校へ届いていたよ。

これは、指示詞で示される方が主題になりやすいためと考えられる。

Tsutsui (1983) の条件で問題になるのは、なぜ、顕在的、潜在的を問わず、先行する名詞句が存在しなければならないのか、ということである。顕在的に

も潜在的にも、無助詞格成分に先行する名詞句が存在しない例として、次のような例が挙げられている。

(33) *友達 ϕ (が)死んだ。

(34) *銀行 ϕ (が)生命保険に入ってる。

ただし、(33)は、次のようにすると、自然になり、文末形式の問題ではないかと考えられる。

(35) 友達 ϕ 死んだんだって？

なお、(34)は、意味不明な点もあり、筆者には判断がつかない。

このため、顕在的、潜在的を問わず、先行する名詞句が存在しなければならないという条件は必要ないと思われる。

以上のように、ガ格、ヲ格相当の無助詞格成分は、主題位置に現れる場合を除くと、述語の直前に現れるという条件があると考えられる。この点で、ガ格、ヲ格相当の無助詞格成分の成立には、構造的な条件が関与していると言うことができる。ただし、無助詞格成分は、この条件に合えば必ず成立するものではなく、この他に談話的な条件も関わってくる。また、文体による影響もある。本稿では、このような談話的、文体的条件は、構造的条件に付け加わる形で存在すると考える。つまり、ガ格、ヲ格相当の無助詞格成分は、一つには、述語の直前という位置に現れることによって、構造的にその存在が認可される。そうでない場合は、主題位置に現れることによって認可される。ただし、それが適切な発話とされるかどうかは、さらに談話的、文体的条件によるのである。

4. 二格相当の無助詞格

次に、二格相当の無助詞格について見てみたい。2. でもふれたように、ここで問題になるのは、なぜ、二格のうちでも方向、着点を示すものに限られるのかということである。ただし、次のように、文頭にある場合、方向、着点以外の二格相当の無助詞格成分が許される。

(36) a. ? 太郎があの子 ϕ (に)ラブレターを渡したんだって。

b. あの子 ϕ (に)、太郎がラブレターを渡したんだって。

(37) a. ? 太郎がその靈感商法 ϕ (に)ひっかかっちゃったらしいよ。

b. その靈感商法 ϕ (に)、太郎がひっかかっちゃったらしいよ。

これは、ガ格、ヲ格相当の無助詞格の場合と同様、主題位置に現れているものと考え、以下の議論では除外する。

石田 (1997) は、方向、着点の二格と相手の二格の違いとして、3項動詞に関して、「最も自然な語順 (石田 (1997: 45))」の違いを指摘している。次の例は、石田 (1997: 44f.) の例である。

(38) お兄ちゃん、お茶わん ϕ (を)食器棚 ϕ (に)しまうの手伝ってよ。

(39) 太郎君、生ゴミ ϕ (を)裏庭 ϕ (に)埋めるの手伝って。

これは、着点の二格相当の無助詞格であり、自然である。一方、次の例は、相手の二格相当の無助詞格であり、不自然になる (例文の判定は石田 (1997) による)。

(40) *太郎のやつが花子 ϕ (に)プレゼント ϕ (を)贈ったの知ってる？

(41) *あの女がお前 ϕ (に)紙袋 ϕ (を)渡すのを見たという人がいるんだよ。

両者の違いは、それぞれの最も自然な語順が、前者が「ヲ格相当-二格相当」であり、後者が「二格相当-ヲ格相当」であることであるとされる。このことから、二格相当の無助詞格は、述語に近い位置に現れるとされる。これは、正しいと思われる。

一方、石田 (1997: 44) は、次のような存在点の二格相当の無助詞格についての事実を指摘している (例文の判定は石田 (1997) による)。

(42) それでいつまでアメリカ ϕ (に)いるの？

(43) ??オオカミってアフリカ ϕ (に)いるの？

石田 (1997: 44) は、この自然さの違いを「主体の意志に基づく滞在」を表すか、「存在や生息といった内容」を表すかの違いによるとしている。しかしながら、これは「意志性」の違いではなく、これも語順の問題ではないかと考えられる。久野 (1973) に従えば、(42)は、所在文であり、基本語順は「～が～に～」となり、(43)は、存在文であり、基本語順は「～に～が～」になる。つまり、基本語順 (石田 (1997) の「最も自然な語順」) において述語の直前にある場合に、二格相当の無助詞格成分が成立することになる。これは、石田 (1997) の先の議論とも合致する。

また、沼田 (近刊) の指摘するように、「存在や生息といった内容」であっても、無助詞格が自然になる場合もある (例文の判定は沼田 (近刊) による)。

(44) えーっ！イルカって川中 ϕ (に)いたっけ？

(45) ?鳥って、普通は木の上 ϕ (に)住んでるんじゃないの？

これについて、沼田 (近刊) は、「無助詞名詞句に「上」「中」などを補い、場所性、空間性を補強すると許容度があがる」としている。同様に次のような例も挙げている。

(46) a. *由美子, 名古屋φ(に)泊まるって。

b. 由美子, 名古屋のホテルφ(に)泊まるって。

これらのことから、二格相当の無助詞格には、次の二つの条件があるのではないかと考えられる。

a) 二格名詞句が動詞と隣接していること。

b) 二格名詞句が場所として捉えやすいこと。

b) の条件のため、相手の二格相当の無助詞格が成立しないと考えられる。それでは、なぜ、b) のような条件が存在するのであろうか。本来あるべき、意味を持つ要素がないということは、それが復元可能でなければならないわけである。ところが、次のような文であっても、動詞の結合価から、その失われた要素が復元可能であるはずである。

(47) *太郎が次郎φ(に)会った。

事実、この文は不適格ではあるが、解釈可能である。したがって、二格相当の無助詞格の問題は、文字通り、失われた要素を復元可能かという問題ではないことがわかる。むしろ、無助詞格において復元可能性が関わっているとすると、それは、もっと制限のきついものではないかと考えられる。そこで、次のような条件を考えてみよう。

二格相当の無助詞格成分は、格関係が局所的に解釈可能でなければならない。

ここで、「局所的」とは、当該の無助詞格成分とその直後の成分の範囲と考える。直後の成分が述語であり、それが方向、着点の二格をとり、当該の無助詞格成分が場所と捉えやすいものであった場合、局所的に、当該の無助詞格成分を二格と解釈することが可能である。一方、直後の述語が相手をとるような動詞であった場合、当該の無助詞格成分が人間であっても、それは局所的には動作主等の可能性もあり、局所的に解釈することができない（非局所的に、ガ格名詞句の存在を考慮して、初めて解釈可能になる）。また、直後の成分が述語でなかった場合、結合価の情報が得られず、局所的に解釈できなくなってしまうのである。

このように考えると、なぜ、二格相当の無助詞格成分が方向、着点を示すものに限られるのか、わかる。また、これは、単に構造上の条件ではなく、意味解釈上の条件であると考えられる。沼田（近刊）が指摘するように、二格相当の無助詞格については、研究者によって観察にずれがあり、安定しない例も多い。石田（1997）は、「二格相当の無助詞名詞句の生起条件とは、動詞の直前

という統語環境に現れることの約束されているもののみが共通して有している何らかの文法的な特性である可能性が高い (p.51)」とし、二格相当の無助詞格の現象を統語論の領域に位置づけているが、その場合、このような不安定さ、あるいはわずかな表現の変更による許容度の差は説明しにくい。一方、本稿のように意味解釈上の問題と捉えれば、解釈可能性にゆれが生じるという形で説明が可能になるであろう。

5. 無助詞格のありか

以上見てきたように、無助詞格には、主題位置に生じるものとそうでないものがある。主題位置に現れるものは、談話上、その存在が認可される。一方、非主題位置に生じるものは、ガ格、ヲ格相当のものと二格相当のものに分けられ、前者は述語の直前に生じるという、構造上の隣接性から認可されるのに対して、後者は、局所的に格関係が解釈可能であるかという、意味解釈上の条件から認可される。

ガ格、ヲ格相当の無助詞格がなぜ構造上認可されるのかと言うと、「が」「を」が文法格であり、形式的な格助詞であるため、本来、復元可能性から免れているからである。一方、二格相当の無助詞格の場合、必ずしも文法格とは言えず、特に無助詞格化する方向、着点の「に」の場合、意味格と考えられる。そのため、復元可能性から免れられず、意味解釈上の条件が必要になってくるのである。

無助詞格の現象は、複合的な現象であり、構造上認可されるガ格、ヲ格相当のものであっても、さらに談話上の制約が加わることになる。そのみならず、本稿で論じたように、ガ格、ヲ格相当のものと二格相当のものをひとしなみに扱えないことになる。この意味で、二重に複合的な現象であると言える。

6. おわりに

本稿では、無助詞格を主題位置に生じるもの、ガ格、ヲ格相当のもの、二格相当のものの三つのタイプに分け、それぞれ認可される言語レベルが異なることを論じてきた。しかしながら、それぞれの条件の精緻化も含め、本稿で明らかにすることのできなかったことも多い。

本稿では、述語の直前以外の位置に現れる無助詞格を主題位置に現れるもの

として、別のタイプとした。このような無助詞格による主題と「は」による主題の機能的な違いについては、これまでも、尾上 (1987), 長谷川 (1993), 渡辺 (1995) など、様々論じられてきている。また、無助詞格による主題が成立する条件に関しても、丹羽 (1989) で詳細に論じられているが、庵 (1998) で問題点も指摘されている。これらについて検討することはできなかった。さらに、主題位置というものを考えた場合、無助詞格の場合と「は」の場合とで、構造的な観点からの検討も必要になってくる。

また、ガ格、ヲ格、二格相当の無助詞格についても、その成立は、本稿で見た構造的な条件、意味解釈上の条件だけで説明しきれものではない。さらに談話上、文体上の条件が付け加わってくるが、これについて、そして両者の関係についても検討することができなかった。

今後の課題としたい。

注

* 本稿は2000年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「WWW上での生成的辞書の構築：辞書を中心とした日本語文法の構造化」(研究代表者：外池俊幸、課題番号：10558034)による研究の一部である。

- (1) 丹羽 (1989) の「既知性」については、庵 (1998) で問題点も指摘されている。
- (2) 以下で、先行研究から例文を引用する場合、例文およびその判定の提示の仕方については、本稿のスタイルに適宜変更している。
- (3) 主題位置は複数存在し得ると仮定する。ただし、「は」による主題と無助詞格による主題が、同一の位置であるのかは明らかではない。例えば、次の文の「太郎は」は主題の解釈にはとりにくく、対比と考えられる。
 - i) この本 ϕ (を)、太郎は次郎に薦めたの？
 このため、「は」による主題位置は無助詞格による主題位置よりも上位にあるということも考えられる。この点については、open question としておきたい。
- (4) ただし、無助詞格成分が文中にある場合の例文の判定は微妙であり、問題は残る。
- (5) Tsutsui (1983) においては、例文の判定は、話者への調査に基づき、○, ?, ??, * の各判定の人数によって示されている。なお、a. b. c. それぞれ、/12, 5, 3, 2/, /1, 8, 8, 5/, /11, 3, 3, 5/の数になっている。

参考文献

Saito, Mamoru (1985), "Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications," Ph. D. dissertation, MIT.

- Tsutsui, Michio(1983), "Ellipsis of *ga*," *Papers in Japanese Linguistics* 9, pp. 199-244.
- 庵功雄 (1998)「名詞句における助詞の有無と名詞句のステータスの相関についての一考察」,『言語文化』35, pp. 21-32, 一橋大学
- 石田尊 (1997)「二格相当の無助詞名詞句について」,『筑波日本語研究』2, pp. 41-56, 筑波大学
- 大谷博美 (1995a)「ハとヲとの格の助詞の省略」, 宮島達夫・仁田義雄 (編)『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』, pp. 62-66, くろしお出版
- 大谷博美 (1995b)「ハとガとハもガも使えない文」, 宮島達夫・仁田義雄 (編)『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』, pp. 287-295, くろしお出版
- 尾上圭介 (1987)「主語にハもガも使えない文について」, 国語学会昭和62年春季大会ハンドアウト
- 尾上圭介 (1996)「主語にハもガも使えない文について」, 認知科学会第13回大会ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』, ひつじ書房
- 加藤重広 (1997)「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」,『富山大学人文学部紀要』27, pp. 19-82, 富山大学
- 金水敏 (1996)「歴史的にみた「格助詞」の機能」, 認知科学会第13回大会ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」
- 久野暉 (1973)『日本文法研究』, 大修館書店
- 筒井通雄 (1984)「ハ」の省略」,『言語』13: 5, pp. 112-121
- 西垣内泰介 (1992)「日本語の非対格性と θ 理論」,『大阪大学言語文化学』1, pp. 40-52, 大阪大学
- 丹羽哲也 (1989)「無助詞格の機能—主題と格と語順—」,『国語国文』58: 10, pp. 38-57, 京都大学
- 沼田善子 (近刊)「方向から着点へ, 無助詞名詞句の展開—へ格及び二格相当の名詞句の場合—」, 竹沢幸一・青木三郎 (編)『空間表現と文法 (仮題)』, くろしお出版
- 野田尚史 (1996)「ハ」と「ガ」, くろしお出版
- 長谷川ユリ (1993)「話しことばにおける「無助詞」の機能」,『日本語教育』80, pp. 158-168
- 丸山直子 (1995)「話しことばにおける無助詞格成分の格」,『計量国語学』19: 8, pp. 365-380
- 丸山直子 (1996a)「助詞の脱落現象」,『言語』25: 1, pp. 74-80
- 丸山直子 (1996b)「話しことばにおける無助詞格成分」, 認知科学会第13回大会ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」
- 三原健一 (1994)『日本語の統語構造』, 松柏社
- 村木新次郎 (1991)『日本語動詞の諸相』, ひつじ書房
- 和氣愛仁 (1996)「ハ」の機能」,『筑波日本語研究』1, pp. 59-72, 筑波大学
- 渡辺誠治 (1995)「題目表示に関わる「ハ」「ッテ」をめぐって」,『さわらび』4, pp. 54-64, 神戸市外国語大学